

【一般口演1】 第1席

鈔正統本『甲乙經』の検証

東京 篠原 孝市

『鍼灸甲乙經』（以下「甲乙經」と略称する）の研究に際して、古今医統正脈全書所収本（略称「医統本」）、明藍格抄本（略称「明抄本」）、それに鈔正統2年重刊本（略称「鈔正統本」）の3書を相互に参照することが一般化するようになったのは、1981年秋に刊行された『東洋医学善本叢書』において、後者2書が初めて影印されて以来のことである。

叢書刊行に際して執筆された解説で『甲乙經』を担当した私は、これら鈔本の成立時期について、大略、次のように断じた。

1. 鈔正統本について、楊守敬の『日本訪書志』では「此本不載楊上善説。凡林億等校語俱不載。亦無林億等序。知所原在末校正之前」と主張している。しかし、医統本の卷之1・第9篇の第1条末に置かれた「此段旧在經脈根結之末。今移在此」という割注をもととして考證すれば、本書を宋改以前の書とすることには疑義がある。その詳細な検討については他日を期すことにする。

2. 明抄本は、その藍格抄本という書写形式から見て、明末清初を最終的書写時期とする。また内容自体の成立については、①他のテキストに見られない宋臣の銜名や刊記があるので、宋改を経ている、②割注に『太素』との校合があるので南宋以前に校訂されている、③『素問』『靈樞』との対応巻次を見ると12巻本を使用していることがわかるので、それらの12巻本が成立した元以降における付加がある、と判断する。誤脱はあるものの、多くの採るべきところを含む、極めて重要な古鈔本である。

以上のように述べて、鈔正統本については、その評価を留保したのであるが、その後、20年あまりを経過するなかで、黄龍祥が新校本『黄帝針灸甲乙經』所収の概論において、「“正統本”非宋改以前古本」として、やはり楊守敬の説に異議を唱えた。他方、張燦琿等は『鍼灸甲乙經校注』の校注後記で鈔正統本について「有關正統抄本的許多問題，現在還難以作出結論」として態度を留保している。即ち鈔正統本の評価や価値については、今日に至るも、未だ定まるには至っていない。

本発表では、鈔正統本と医統本などとの字句の異同に関する再検討結果について報告するとともに、黄氏、張氏らの主張についても吟味してみたいと思う。